

丹波・タンボフ交流協会

似た名前きっかけに交流

代表団迎えタンボフ展・講演会

10月28日、兵庫県丹波市の春日住民センターで、「タンバータンボフ展」という風変わった催し物が開催されました。副題は「丹波市－タンボフ市との姉妹都市提携に向けた国際交流展」とごく普通に見えますが、そのとっかかりが面白い。何せ、名前が似ていることだけをきっかけに丹波市とロシアのタンボフ市の民間交流を進め、あわよくば姉妹提携にまでもっていかうという「丹波・タンボフ交流協会」(河津雅人・V フェドートフ共同代表)の最初の交流イベントだったのです。

タンバータンボフ展では、ロシア側代表のヴィヤチェスラフ・フェドートフ氏ら一行 6 人がタンボフ市から来日し、ロシアの伝統工芸漆器「パレフ」や起き上がりこぼし「ネバリャーシュカ」、タンボフゆかりのラフマニノフの関連書籍などを持参。丹波側は丹波布の着物や禅画、京都・南丹市出身でロシア構成主義の鉄を素材とした抽象彫刻家・JUN TAMBA 氏(本名塚脇淳／神戸大学教授)の作品模型や写真などを展示し、この面でも一風変わった国際美術工芸展になりました。

同時に行われた特別講演会では約 50 名の参加者を前に、フェドートフ氏がタンボフ市の紹介を行い、JUN 氏が『創造の軌跡をたどって』と題してロシア・ペンザ市に滞在して国際彫刻シンポに参加した体験談を、そして神戸市の志水通男氏が第二次大戦後タンボフ市に抑留されていた父親と現地の少女との心温まる交流のエピソードを披露しました。

タンボフ市はモスクワから南に 450km ほど離れた位置にあるタンボフ州の州都。車なら約 6 時間、夜行列車なら 1 泊で行くことができます。古い教会や昔の貴族の暮らしがわかる博物館があり、りんごやジャガイモなどの農産物が豊富にとれる地方都市です。

丹波市は兵庫県の中央東部に位置し、東を京都府と接しています。大阪から電車で 1 時間半、人口 65000 人、丹波黒大豆や山の芋、丹波栗などこれまた豊かな農産物に恵まれた町です。

丹波・タンボフ交流協会が結成されたのは、2017 年 1 月にフェドートフ氏がインターネットで丹波市役所に送ったロシア語の新年あいさつと動画がそもそもの始まり。ロ日協会タンボフ支部長のフェドートフさんは兵庫県の地図を見て似た名前の町 Tamba を発見し、Tambov との姉妹提携を思い立ちました。



動画は真冬のタンボフ市の広場で同市の若い男女が AKB48 の『恋するフォーチュンクッキー』を踊るもの。姉妹都市提携を呼び掛ける熱烈な新年あいさつを突然受け取った丹波市は困惑しつつも、その手紙の翻訳をロシア語のできる河津雅人さんに依頼しました。しかし、単に名前が似ているというだけで姉妹提携ができるわけではありません。丹波市はこの申し出を断ったものの、河津さんとフェドートフさんのやり取りは続き、まずは両市の交流を民間レベルで進めようと交流協会が設立され、今回のタンバータンボフ展の開催にこぎつけたというわけです。

フェドートフさんが地図で Tamba の名前を発見するきっかけを作ったのは、志水通男さんの父・志水實一さん(故人)でした。4 年前、志水さんのもとに「ロシアの女性から『68 年前にももらった写真を返したい』と連絡があった」と外務省・厚労省を通じて連絡が入りました。ロシアから送られてきた軍服姿の父・實一さんの肖像写真が入った封筒にはフェドートフさんの手紙とロシアの新聞記事のコピーが同封されていました。新聞記事には、抑留中タンボフ市で道路工事などに従事していた實一さんら日本兵 6 人と当時 10 歳だった地元の少女との交流のほか、日本兵たちの勤勉で誇りを忘れぬ振舞いが現地の人々の心を惹きつけたことなどが書かれていました。以後、志水さんはタンボフ市を訪れるなどして、写真の持ち主やフェドートフさんとも個人的な交流を続けてきました。そうして、フェドートフさんが、實一さんの出身地である兵庫県宍粟市を地図で探しているうちに近くにある丹波市(Tamba)の名前を見つけたというわけです。

フェドートフさんは地図で Tamba の名前を見つけた時「これは運命だ」と思ったそうです。世の中には様々な偶然があるものです。しかし、偶然から新しい出会いが生まれ、お互いに見知らぬ者同士の交流が始まるのも、楽しいものです。丹波・タンボフ交流協会の活動が今後より大きく広がることを期待せずにはいられません。

なお、これもまったく偶然ですが、筆者の出身地および現住所は兵庫県丹波市であることをつけ加えておきます(それだけに、この丹波・タンボフ交流協会には個人的にも少々肩入れしたくなるのです)。(伏田昌義)